

調査結果報告書

学士学位取得者に対する「1年後・5年後調査」の分析
—「学位取得に対する満足度」を中心に—

**The Result of Follow-up Surveys to the Earners of
a Bachelor Degree of NIAD-UE :
Focusing on the satisfaction level**

平成 28 年 1 月

独立行政法人大学評価・学位授与機構 研究開発部

Research Department, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

宮崎和光/Kazuteru Miyazaki 毛利尚武/Naotake Mouri 武市正人/Masato Takeichi

表題

学士学位取得者に対する「1年後・5年後調査」の分析
－「学位取得に対する満足度」を中心に－

要旨

大学評価・学位授与機構(NIAD-UE)では、短期大学・高等専門学校卒業生及び専門学校修了者等を対象に、単位累積加算を基にした学士の学位授与事業を行っている。当機構の研究開発部では、今後の学位授与事業のあり方を検討することを目的として、この制度を利用して学士の学位を取得した者の属性および取得学位の社会的評価などを把握するための調査を実施している。

その一環として、平成11年度より学位取得者に対する「1年後・5年後調査」を毎年、継続的に実施してきた。この調査の分析結果の一部(平成13年までの調査結果)は、当機構が発行する「学位研究」に報告されている[7, 8, 10]。そこでは、全般的な回答の傾向が詳しく分析されており、調査の第一義的な目的が一定程度、達成されているといえるが、これまでの分析では、例えば、一度は不合格となりながらも再申請後に合格した者の意見や同一人物の経年的な変化などは充分には捉えられていない。

本報告書では、「学位取得に対する満足度」に関する回答結果に基づき、再申請後に合格した者の意見および同一人物の経年的な変化、すなわち個々の学位取得者が学位取得の1年後、5年後にどのように感じているのかといったことの分析を行った結果を報告する。その結果、専攻の区分(分野)ごとに異なる特徴が見られること、および、とくに保健衛生分野における学位取得者に関わる学位取得と従事する職との関連をさらに調査する必要性があることが浮き彫りになった。これらは学位授与事業における改善に資する成果であるといえる。

キーワード

学位授与事業, 学位取得に対する満足度, 再申請合格者, 職場における学士の学位の評価

1 はじめに

大学評価・学位授与機構(NIAD-UE)では、短期大学・高等専門学校卒業生及び専門学校修了者等を対象に、単位累積加算を基にした学士の学位授与事業を行っている。この制度を利用して学士の学位授与を希望する者は、「専攻の区分」¹と称される専門分野ごとに定められている所定の単位を大学等において修得するとともに、「学修成果」と呼ばれるレポート等²を作成する必要がある。申請は、4月および10月の年2回受け付けており、それぞれ6ヶ月以内に行われる試験と審査を経て学位が授与されている。なお、当機構が認定した短期大学・高等専門学校の専攻科を修了する見込みの者で、かつ修得単位に関する審査の基準を満たす見込みの者には「見込み申請」と称される専攻科修了前の申請が認められている。

本制度による学位授与者数は、平成 26 年度には 1 年間に 2500 人を超え、この制度が発足した平成 4 年度から現在までの累積の学位取得者数は 4 万人を越えている。このような学位取得者の増加にともない研究開発部では、この制度を利用した学士の学位取得者の属性を明らかにするとともに、取得学位が社会的にどのように評価され、活用されているのかを把握すること等を目的として、平成 11 年度より、学位取得者に対するフォローアップ調査である「1 年後・5 年後調査」を毎年、継続的に実施している。また、これとは別に、事務組織を中心として、学位記の送付と同時に実施されるアンケート調査である「直後調査」も実施している³。

これらの調査の主な目的は、『「学位授与業務の中で扱っている対象、すなわち申請者、学位授与者」について「きちんと把握する」』（文献[10]p. 175, および文献[9]より引用）ことにある。その下で、『本制度の利用者層の社会的属性を明らかにすること、および機構が授与する学士の学位に対する社会的評価を測定すること』（文献[8]p. 77 より引用）を目的として毎年調査を重ねている。1 年後調査、5 年後調査とも調査票は共通であり、各項目に対する回答の経年的な変化を分析することも可能である。なお、調査の実施の経緯、目的等に関しては、文献[7]に詳しく述べられている。一方、直後調査に関しては、学位授与の通知と同時に調査していることから、1 年後・5 年後調査とは異なる調査票を用いている。

本報告書では、現在、これらの調査で共通に質問している「学位取得に対する満足度」に着目した分析を行う。まず、不合格経験の有無が「学位取得に対する満足度」に与える影響について分析する。具体的には、最低一度は不合格となり再申請の結果合格した者と、一度の申請で合格を果たした者との比較を行う。次に、同一人物の「学位取得に対する満足度」の経年変化に着目した分析を行う。ここでは、「職場における学士の学位の評価」と「学位取得に対する満足度」との関係について分析する。

2 これまでの調査のあらまし

2.1 1 年後・5 年後調査開始以前の調査報告との関連

はじめに述べたように 1 年後・5 年後調査の開始以前から事務組織を中心に直後調査を実施してきた。これまで直後調査に関する報告としては、平成 6 年 4 月期までに学士の学位を申請した者(文献[3])および平成 8 年 10 月期までに申請した者(文献[4])に関する報告が存在する。これらによれば、様々な段階における、学士学位取得の意義や現状などを知ることができるが、「学位取得に対する満足度」が 5 段階で評価されている等、現行の直後調査とは、一部のアンケート項目が異なっている。

また、1 年後・5 年後調査を開始する前年の平成 10 年には、平成 10 年 4 月期までに学位を取得した者全員を対象にした「フォローアップ調査」が実施されており、文献[6]においてその詳細が報告されている。そこでは、本制度に関する意見を、自由記述の形で尋ねた質問に対する回答の分析が行われているなど、興味深い点が多々存在する。しかしながら、この「フォローアップ調査」では、「学位取得に対する満足度」についての質問項目が存在しない等、現行の 1 年後・5 年後調査とはアンケート項目が異なる部分が存在するため、統一的に比較することはできない。

1 平成 27 年 4 月現在、60 種類の専攻の区分が存在する[2]。

2 「音楽」および「美術」の専攻の区分では、それぞれ、レポートの他、「演奏・創作」および「作品」を学修成果とすることが認められている。

3 厳密には、第 1 回目の直後調査は、平成 6 年 9 月に、平成 4 年 4 月期から平成 6 年 4 月期までに申請を行い学位を授与された者に対し一括して行われ、第 2 回目の調査から、授与直後に実施されている[3]。

2.2 1年後・5年後調査に関する報告

1年後・5年後調査は平成11年(1999年)10月に第1回の調査が行われ、これまでに計3回詳細な報告がなされている。現行の調査票を図1~4に示す。途中、追加的な質問項目が一時的に加わったこともあったが、図1~4に示した項目は一貫して用いられてきた。

最初の報告は文献[7]にまとめられている。そこでは、主として、各アンケート項目に対する回答の総括的な集計が行われており、様々なフェーズで、学士学位取得の意義や現状などを知ることができる。一方、「おわりに」には、『「1年後5年後調査」は、これまで機構が行ってきた学位記送付時の「直後調査」や、数年間の授与者全員に対する包括的な「フォローアップ調査」の穴を埋め、より詳細な学位取得後の「追跡」を意図したものであった』(文献[7]p. 77より引用)と述べられているが、実際には単年度の集計であり、厳密な意味での「追跡」には至っていない。また、『この時期は、看護・保健衛生学の分野の授与者が多く、また3月期に比べて人数も限られている』(文献[7]p. 77-p. 78より引用)と述べられているように、データの偏りと量的な限界も指摘されている。

その後、文献[8]では、平成12年度に実施された第2回(春実施)および第3回目(秋実施)の「1年後・5年後調査」のデータに基づく分析が報告されている。そこでは、申請者を文献[6]で提示された11のグループに分け、(1)同一経過年内におけるグループ間の比較、(2)同一グループ内における1年後から5年後の変化(比較)、およびこれらふたつを組み合わせ(3)グループ間における差違の表れ方の時間の経過にともなう変化が分析されている。実際には(1)に重きが置かれた報告であるが、(2)の観点にも着目しており、文献[7]では不十分であった「追跡」を意識した報告がなされている。

一方、本来、「追跡」は同一人物の経年変化を追跡すべきものであるが、この点は実施されていない。さらに、「まとめ」には、『しかしながら、同一グループ内にあっても、学位取得によって「大卒」と扱われるようになった人とならない人、満足度の高い人と低い人等がいることは当然であり、しかもバラツキは十分に大きい。これらのバラツキがいかなる要因に規定されているかについては全く解明されておらず、同様に専攻分野間での差違を説明する要因についても現段階では推論の域を出ないものも多い。』(文献[8]p. 91-p. 92より引用)と述べられており、「学位取得に対する満足度」がひとつの重要な指針であり、それに着目した分析の必要性が指摘されている。

直近の報告は文献[10]にまとめられている。そこでは、平成13年度に実施された「1年後・5年後調査」のデータ(春、秋2回分)に基づく、専攻の区分「保健衛生学」における「職場における学士の学位の評価」(図2に示す問5)「学位取得の意味」(図3に示す問10)「学位取得に対する満足度」(図4に示す問11)に関する詳細な分析がなされている。

まず、「職場における学士の学位の評価」に関しては、多項ロジット分析を用いて、機構から授与された学士の学位が「大卒と同等」とした人がどのような人たちであるかを分析している。そこでの分析によれば、統計的に有意な影響を及ぼしているのは職種、勤務先の規模、就職・転職であるとしている。具体的には、例えば、『給料が大卒と同等であるとしているのは「教員もしくは研究職」であり、また従業員数が1000人以上の大規模な機関では大卒と同等とした者が少ない。また、認定専攻科を修了して新たに就職した場合、あるいは学位取得後に転職した場合には大卒として扱われる確率が有意に高くなっている』(文献[10]p. 165より一部抜粋し引用)と述べている。また、学位取得の意味や、学位取得に対する満足度についても分析されており、特に満足度に関しては、『「認定専攻科における単位取得者」「大学院進学者」「大学卒業経験者」の満足度が有意に高く、「放送大学・大学通信制教育部以外で単位を修得した者」の満足度が高いわけではない。』(文献[10]p. 169-p. 170より一部抜粋し引用)と述べている。

「職場における学士の学位の評価」は、「大卒と同等」とした人に着目した分析を行って

いるが、本来は、「大卒以上」「大卒と同等」「大卒と短大・高専卒の間」「短大・高専卒」の回答項目間には明確な順序関係が存在しており、これらを考慮に入れた分布同士の比較として議論すべきである。また、このような個人の差が表れやすい項目に関しては、単年度のデータではなく、同一人物の継続的な経過を調べるべきである。特に、「学位取得に対する満足度」との関係においては、同一人物の「学位取得に対する満足度」の増減に着目した分析が有効であると考えられる。

2.3 本報告書における接近法

2.2 節で述べたように、これまでの報告では、不合格者の意見は捉えられていない。そもそも、本調査は合格者に対する調査なので、これはある意味やむを得ないことのように思われるが、実際には、一度不合格となった者が再度申請して合格するケースは少なからず存在するので、一度の申請で合格した者(以下、「初申請合格者」と呼ぶ)と一度不合格となった後に合格した者(以下、「再申請合格者」と呼ぶ)を比較することで、ある程度は不合格者の意見を捉えることができると考える。

本報告書では、3章において、「学位取得に対する満足度」に着目し、初申請合格者と再申請合格者の満足度の差異を分析する。これにより、これまで捉えられたことのない不合格経験者の意見の一端が初めて表に出ることになる。

また、これまでの報告は厳密な意味での経年変化を捉えきれていない。そこで、本報告書では、同一人物を追跡した比較を行う。具体的には、4章において、同一人物の「学位取得に対する満足度」の増減と「職場における学士の学位の評価」との関係进行分析する。いずれの章においても、統計的検定により差異を検出する。具体的には、ふたつの値同士の比較にはt検定、分布同士の検定には、 χ^2 検定の一種であるマンテル検定[1]を利用する。なお、有意水準は、ともに5%に設定した。

3 再申請合格者の「学位取得に対する満足度」に関する分析

3.1 基本方針

本章では、これまでの報告では考慮されてこなかった不合格者の意見の一端を捉えることを試みる。具体的には、最低1点、最高10点の10段階で評価される「学位取得に対する満足度」に関する質問を対象に、初申請合格者と再申請合格者の比較を行う。

再申請合格者は、少なくとも1回は不合格となった者であり、合格者に対してアンケート調査を実施している中で、唯一、不合格を経験した者の意見を垣間見ることができる部分である。

3.2 分析対象

表1に、本研究が対象とする各調査時期の期間、対象者数、回答者数および回答率を示す。直後調査に関しては、既に述べているように初期のアンケートでは調査項目が異なっており現行のアンケート結果と直接的な比較が行えない。更に、データの整理状況等を総合的に勘案し、平成13年4月期申請者以降の回答を分析の対象とした。1年後・5年後調査に関しては、実施当初から平成25年の時点でデータの入力および整理が完了している平成24年春実施までのデータ(1年後調査については平成23年4月期申請者、5年後調査については平成19年4月期申請者まで)を利用した。

表 1: 調査時期

	データの先頭	データの末尾	対象者数	回答者数	回答率
直後	平成 13 年 4 月期	平成 25 年 4 月期	30829	17727	57.5%
1 年後	平成 10 年 4 月期	平成 23 年 4 月期	30159	10864	36.0%
5 年後	平成 6 年 4 月期	平成 19 年 4 月期	22124	5646	25.5%

表 2 に、専攻の区分ごとに、各調査時期の回答者数の詳細を示す。各専攻の区分において、最初の行が初申請合格者数、次の行が再申請合格者数である。なお、認定専攻科出身者とそれ以外を分けて示してある。その中で、「同一人物」欄は、すべての調査(直後、1 年後、5 年後調査)にデータが存在する回答者の人数である。

表 2 より、同一人物を追跡した場合、再申請合格者数は、初申請合格者数の 10 分の 1 以下である。そのため、本章では、初申請合格者と再申請合格者を合わせた形で分析を進める。具体的には、表中に太字で示した「同一人物」欄の初申請合格者数と再申請合格者数の合計値が 100 以上である以下の 6 つの評価対象に注目し分析する。(各評価対象の右側には、以下本報告書で用いる略称を併記した。)

- ・「工学」の学士が授与された認定専攻科出身者：工学(専)
- ・「看護学」の学士が授与された認定専攻科出身者：看護(専)
- ・「看護学」の学士が授与された認定専攻科出身でない者：看護(般)
- ・「保健衛生学」の学士が授与された認定専攻科出身でない者：保健衛生(般)
- ・「栄養学」の学士が授与された認定専攻科出身者：栄養(専)
- ・「芸術学」の学士が授与された認定専攻科出身者：芸術(専)

看護学のみ、認定専攻科出身者とそれ以外の者とがともに分析対象となっているが、それ以外の 5 つの評価対象については、どちらか一方のみが分析の対象となっている。すなわち、工学、栄養学、芸術学では、認定専攻科出身者、保健衛生学では、認定専攻科出身者以外が対象とされる。

また、参考までに、平成 25 年 4 月期申請者までの上記 6 つの評価対象および全体の申請者数、合格者数および合格率を表 3 に示す。工学(専)および保健衛生(般)の合格率は高く、芸術(専)や看護(般)の合格率が低い。また、認定専攻科出身者は、それ以外の者よりも合格率が高いことが表よりみてとれる。

3.3 分析結果

表 4 に初申請合格者と再申請合格者の「学位取得に対する満足度」の平均値を示す。なお、括弧内には標準偏差を示した。太字で示した部分が、初申請合格者と再申請合格者の間に有意差が認められた部分である。

表 4 より次のことが言える。工学(専)は、直後、1 年後、5 年後調査ともに、初申請合格者よりも再申請合格者の満足度が有意に低い。看護学(専)は、直後、1 年後で、初申請合格者よりも再申請合格者の「学位取得に対する満足度」が有意に高い。栄養(専)は、5 年後で、初申請合格者よりも再申請合格者の「学位取得に対する満足度」が有意に低い。上記以外の部分では、有意な差が認められなかった。

表2：回答者数

	認定専攻科出身者				認定専攻科出身者以外			
	同一人物	直後	1年後	5年後	同一人物	直後	1年後	5年後
文学の初申請合格者数	10	92	88	81	8	62	62	40
文学の再申請合格者数	0	8	10	5	3	7	7	4
教育学の初申請合格者数	73	1124	590	363	9	52	51	23
教育学の再申請合格者数	1	14	8	3	1	10	6	3
神学の初申請合格者数	0	5	2	1	1	3	3	2
神学の再申請合格者数	0	0	1	2	0	1	2	0
社会学の初申請合格者数	2	20	15	13	4	12	10	12
社会学の再申請合格者数	0	1	1	1	1	4	1	1
教養の初申請合格者数	2	20	38	18	0	16	10	4
教養の再申請合格者数	0	1	4	3	1	2	4	3
学芸の初申請合格者数	0	2	4	6	1	19	10	4
学芸の再申請合格者数	0	0	0	0	2	4	2	2
社会科学の初申請合格者数	0	0	0	0	1	13	4	1
社会科学の再申請合格者数	0	0	0	0	1	3	4	2
法学の初申請合格者数	0	0	0	0	6	30	24	17
法学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	4	0	0
政治学の初申請合格者数	0	0	0	0	0	9	6	2
政治学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	1	1	2
経済学の初申請合格者数	0	0	0	0	6	31	15	11
経済学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	0	1	4
商学の初申請合格者数	0	12	8	12	1	10	6	4
商学の再申請合格者数	0	2	3	2	0	0	2	3
経営学の初申請合格者数	2	54	27	22	4	35	25	14
経営学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	1	2	1
理学の初申請合格者数	0	0	0	0	12	59	47	31
理学の再申請合格者数	0	0	0	0	1	6	6	2
薬学の初申請合格者数	0	0	0	0	1	1	2	1
薬学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	0	0	0
看護学の初申請合格者数	194	1406	911	477	135	1148	736	320
看護学の再申請合格者数	13	80	61	38	27	174	124	61
保健衛生学の初申請合格者数	24	146	134	82	329	1542	1682	1116
保健衛生学の再申請合格者数	1	3	3	2	11	55	41	22
鍼灸学の初申請合格者数	6	24	30	13	5	26	28	15
鍼灸学の再申請合格者数	1	2	1	1	0	4	1	0
栄養学の初申請合格者数	129	947	763	489	2	11	8	5
栄養学の再申請合格者数	10	79	53	23	1	1	3	1
工学の初申請合格者数	353	8209	3875	1399	16	102	69	51
工学の再申請合格者数	6	212	99	42	2	14	11	5
芸術工学の初申請合格者数	5	117	87	51	0	2	3	2
芸術工学の再申請合格者数	0	1	1	1	0	0	0	0
商船学の初申請合格者数	3	69	19	6	0	0	0	0
商船学の再申請合格者数	0	2	1	0	0	0	0	0
農学の初申請合格者数	5	33	32	24	3	17	13	5
農学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	1	0	0
水産学の初申請合格者数	0	0	0	0	0	4	2	1
水産学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	0	0	0
家政学の初申請合格者数	1	22	19	12	0	1	1	2
家政学の再申請合格者数	0	1	0	4	1	2	3	2
芸術学の初申請合格者数	96	1264	823	586	3	27	16	8
芸術学の再申請合格者数	8	57	43	39	0	4	3	1
体育学の初申請合格者数	3	28	25	14	1	8	7	1
体育学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	0	0	0
口腔保健学の初申請合格者数	0	125	20	0	0	5	2	0
口腔保健学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	1	0	0
薬科学の初申請合格者数	0	0	0	0	0	1	0	0
薬科学の再申請合格者数	0	0	0	0	0	0	0	0

表 3: 本稿で対象とする各評価対象および全体の申請者数, 合格者数および合格率

専攻の区分 認定専攻科(専)/一般(般)	工学 (専)	看護学 (専)	看護学 (般)	保健衛生学 (般)	栄養学 (専)	芸術学 (専)	全体 (専)+(般)	全体 (専)	全体 (般)
申請者数	18906	3077	2545	3828	2647	4959	42549	34446	8103
合格者数	18039	2631	2002	3690	2336	3615	38857	31942	6915
合格率 (%)	95.4	85.5	78.7	96.4	88.3	72.9	91.3	92.7	85.3

表 4: 各 6 グループにおける初申請合格者と再申請合格者の「学位取得に対する満足度」の平均値 (括弧内の数値は標準偏差)

直後	工学 (専)	看護学 (専)	看護 (般)	保健衛生 (般)	栄養 (専)	芸術 (専)
初申請合格者	8.08 (1.85)	8.85 (1.42)	8.99 (1.33)	8.32 (1.61)	8.90 (1.43)	8.50 (1.62)
再申請合格者	7.03 (2.65)	9.28 (1.07)	8.98 (1.33)	8.58 (1.50)	8.82 (1.71)	8.49 (2.12)
1 年後	工学 (専)	看護学 (専)	看護 (般)	保健衛生 (般)	栄養 (専)	芸術 (専)
初申請合格者	7.52 (1.91)	7.71 (1.82)	8.14 (1.74)	7.52 (1.89)	8.03 (1.81)	7.54 (2.09)
再申請合格者	6.44 (2.56)	8.15 (1.76)	8.21 (1.68)	8.10 (1.39)	7.66 (1.90)	7.49 (2.44)
5 年後	工学 (専)	看護学 (専)	看護 (般)	保健衛生 (般)	栄養 (専)	芸術 (専)
初申請合格者	7.61 (1.88)	7.71 (1.92)	8.09 (1.84)	7.39 (2.02)	8.08 (1.76)	7.43 (2.17)
再申請合格者	7.02 (1.85)	7.45 (2.05)	8.36 (1.33)	7.05 (1.87)	6.96 (1.85)	7.21 (2.20)

また, 表 5 に, 初申請者合格者と再申請合格者の人数を合算した場合の, 各評価対象における, 直後, 1 年後および 5 年後調査時の「学位取得に対する満足度」の平均値を示す. なお, 括弧内の数値は標準偏差である. 直後と 1 年後を比較し有意差が認められた場合, 直後と 1 年後の数値を太字にした. 同様に, 1 年後と 5 年後を比較し有意差が認められた場合, 1 年後と 5 年後の数値を太字にした.

表より, 保健衛生 (般) の値がすべて太字になっている. これは, 保健衛生 (般) では, 直後調査時の満足度と 1 年後調査時の「学位取得に対する満足度」に有意な差があり, かつ, 1 年後調査時と 5 年後調査時の間にも有意な差があることを意味する. なお, 保健衛生 (般) 以外では, 有意な差が認められなかった. すなわち, 保健衛生 (般) のみが, 直後よりも 1 年後, 1 年後よりも 5 年後の「学位取得に対する満足度」が有意に下がっていることがわかる.

表 5: 各 6 グループにおける, 直後, 1 年後, および 5 年後調査時の「学位取得に対する満足度」の平均値 (括弧内の数値は標準偏差)

	工学 (専)	看護学 (専)	看護 (般)	保健衛生 (般)	栄養 (専)	芸術 (専)
直後	8.05 (1.88)	8.88 (1.40)	8.99 (1.33)	8.33 (1.61)	8.90 (1.46)	8.50 (1.65)
1 年後	7.49 (1.93)	7.74 (1.82)	8.15 (1.73)	7.54 (1.88)	8.01 (1.82)	7.55 (2.11)
5 年後	7.59 (1.88)	7.69 (1.93)	8.13 (1.77)	7.38 (2.01)	8.03 (1.78)	7.42 (2.17)

4 同一人物の「職場における学士の学位の評価」と「学位取得に対する満足度」の関係に関する分析

4.1 基本方針

3章では、不合格者の意見の一端を捉えることを目的として、初申請合格者と再申請合格者の比較を行ったが、本章では、同一人物の経年的な変化を捉えることを目的として、「職場における学士の学位の評価」と「学位取得に対する満足度」の関係について分析する。

なお、当機構の学士の学位授与制度では、表3に示した合格率のデータからもわかる通り、初申請合格者に比べ、再申請合格者の数が圧倒的に少ないという事実がある。そのため、再申請合格者であり、かつ、直後、1年後、5年後の追跡が可能となる者のデータ数はさらに少なくなる。そこで、本章では、3章で行ったような初申請合格者と再申請合格者の区別はせずに、同一人物の追跡調査を行う。

具体的には、1年後調査時と5年後調査時の両方に回答が存在する回答者に対して、1年後調査時の「学位取得に対する満足度」と5年後調査時の「学位取得に対する満足度」の変化に着目し、図2の問5、すなわち「職場における学士の学位の評価」の分析を行う。「学位取得に対する満足度」の変化としては、1年後調査時よりも5年後調査時の方が「学位取得に対する満足度」が1以上上昇した群(以下、「**上昇群**」と呼ぶ)と1以上下降した群(以下、「**下降群**」と呼ぶ)の2群に分類し比較する。なお、評価対象は、3章同様、工学(専)、看護学(専)、看護学(般)、保健衛生(般)、栄養(専)、および芸術(専)とした。

「職場における学士の学位の評価」では、以下の4つの評価項目

- ・A. 採用時の条件
- ・B. 給料
- ・C. 昇進・将来性
- ・D. 仕事の内容・責任

の各々に対し、以下の4段階での評価を求めている。

- ・1. 大卒以上
- ・2. 大卒と同等
- ・3. 大卒と短大・高専・専門学校卒の間
- ・4. 短大・高専・専門学校卒と同等

この各段階は、評価に関して順序性を有している。そのため、例えば、「大卒と同等」のみを切り出すのではなく、これら4段階を分布として捉え、各評価対象がこれら4段階のうち、どこに偏っているかを判別することが重要となる。一例として、1年後調査における評価項目A(採用時の条件)に注目し、工学(専)と保健衛生(般)における、上記各4段階に対する回答者数の度数分布を図示すると図1のようになる。図1に示されたふたつの分布が同じであるか、また、異なるならば、どちらがよりどの段階に分布しているのかを統計的に検定する必要がある。この図の場合、直感的には、工学(専)は「大卒と同等」側に、保健衛生(般)は「短大・高専・専門学校卒と同等」側に分布していると思われるが、そこに統計的な有意な差が認められるかを調べる必要がある。

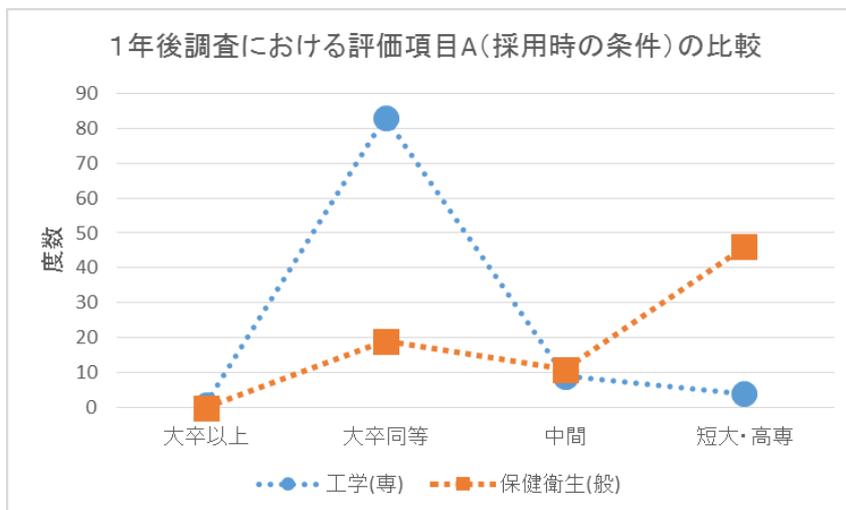


図 1: 1年後調査における評価項目 A(採用時の条件)の工学(専)と保健衛生(般)の比較

そのような順序性を有するデータに対する検定手法としてマンテル検定[1]が知られている。マンテル検定は、アンケート項目の回答に順序がある場合に、回答者の属性の違いによる回答の傾向の差異を検出する際に用いられる検定手法である。本章で対象とする「大卒以上」等の4段階の評価項目の間には、明らかな順序性が認められる。そのため、ここで扱うデータは、マンテル検定の利用に適ったデータであると言える。

以下では、問5の各々の質問項目(A~D)に対し、1年後の分布と5年後の分布に差があるかどうかを、評価対象ごとにマンテル検定により比較する。

4.2 分析結果

表6および表7に「職場における学士の学位の評価」に関する回答結果の分布を示す。各A, B, C, Dの上段が1年後、下段が5年後の回答結果である。ここで、表6は上昇群、表7は下降群の結果である。なお、数値はそれぞれに対する回答者数を表す。

表6および表7に示したデータに対しマンテル検定を行って、各評価対象間の分布の差異を調べた結果を表8に示す。表8の上半分が1年後調査時の結果であり、下半分が5年後調査時の結果である。ここで、「>」は、行に示した評価対象の分布が、列に示した評価対象の分布よりも「大卒以上」側に有意に分布していることを意味し、空白は、有意な差が認められなかったことを意味する。なお、「/」の左側が上昇群、右側が下降群での結果である。例えば、表8上半分(1年後調査時の結果)の工学(専)の評価項目Cと芸術(専)の間には「(空白)/>」と示されている。これは、評価項目Cの1年後調査では、上昇群においては、工学(専)と芸術(専)の間には有意な差は認められないが、下降群においては、芸術(専)よりも工学(専)がより「大卒以上」側に有意に分布していることを意味する。

表8より、工学(専)の分布は、ほぼ、他の評価対象の分布よりも有意に「大卒以上」側に偏っていることがわかる。それに対し、保健衛生(般)の分布は、ほぼ、他の評価対象の分布よりも有意に「短大・高専」側に偏っている。このような傾向は、調査時期や上昇群、下降群の違いによらずほぼ一定であった。

表 6: 上昇群の「職場における学士の学位の評価」に関する回答結果

工学(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	107	1	83	9	4	10
A(5年後)	158	3	110	10	7	28
B(1年後)	107	1	84	6	6	10
B(5年後)	157	4	112	11	5	25
C(1年後)	107	4	74	8	6	15
C(5年後)	157	1	110	13	6	27
D(1年後)	107	5	76	7	6	13
D(5年後)	157	6	104	13	6	28
看護学(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	82	0	41	9	20	12
A(5年後)	73	1	43	6	13	10
B(1年後)	81	0	49	7	16	9
B(5年後)	73	2	45	5	13	8
C(1年後)	81	0	39	10	13	19
C(5年後)	71	2	40	6	11	12
D(1年後)	80	0	39	7	21	13
D(5年後)	72	2	39	5	15	11
看護(般)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	66	1	25	9	19	12
A(5年後)	63	1	23	8	13	18
B(1年後)	66	0	20	8	23	15
B(5年後)	63	1	25	5	14	18
C(1年後)	66	0	26	8	14	18
C(5年後)	63	3	22	8	11	19
D(1年後)	66	3	25	6	20	12
D(5年後)	63	2	23	7	14	17
保健衛生(般)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	133	0	28	9	55	41
A(5年後)	136	0	40	16	44	36
B(1年後)	133	0	30	8	63	32
B(5年後)	136	1	35	17	54	29
C(1年後)	133	0	36	8	56	33
C(5年後)	137	1	46	17	42	31
D(1年後)	133	1	41	7	56	28
D(5年後)	136	3	45	14	46	28
栄養(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	55	0	26	2	15	12
A(5年後)	52	0	28	5	10	9
B(1年後)	54	0	23	2	17	12
B(5年後)	52	0	28	5	8	11
C(1年後)	54	0	22	4	7	21
C(5年後)	52	0	28	3	9	12
D(1年後)	54	0	21	3	14	16
D(5年後)	52	1	31	2	7	11
芸術(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	35	0	13	3	3	16
A(5年後)	39	2	14	1	2	20
B(1年後)	34	0	10	3	3	18
B(5年後)	39	1	15	1	2	20
C(1年後)	32	0	8	2	2	20
C(5年後)	39	1	15	0	3	20
D(1年後)	34	1	13	1	2	17
D(5年後)	39	2	14	0	3	20

表 7: 下降群の「職場における学士の学位の評価」に関する回答結果

工学(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	64	1	50	10	1	2
A(5年後)	93	2	67	10	3	11
B(1年後)	64	0	51	10	0	3
B(5年後)	93	4	64	12	2	11
C(1年後)	64	1	50	7	2	4
C(5年後)	93	2	61	14	4	12
D(1年後)	64	4	46	8	3	3
D(5年後)	92	4	62	12	2	12
看護学(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	69	0	34	8	15	12
A(5年後)	58	2	27	2	19	8
B(1年後)	69	0	38	6	16	9
B(5年後)	58	0	28	2	19	9
C(1年後)	68	0	28	5	15	20
C(5年後)	58	0	25	4	21	8
D(1年後)	70	0	31	5	17	17
D(5年後)	58	0	30	2	17	9
看護(般)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	49	0	16	9	13	11
A(5年後)	47	2	11	4	21	9
B(1年後)	48	0	14	7	16	11
B(5年後)	46	2	11	3	22	8
C(1年後)	48	0	12	10	13	13
C(5年後)	47	3	12	4	19	9
D(1年後)	48	0	12	9	14	13
D(5年後)	47	5	11	3	20	8
保健衛生(般)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	110	0	19	11	46	34
A(5年後)	106	0	10	15	47	34
B(1年後)	110	0	16	12	56	26
B(5年後)	107	0	11	14	54	28
C(1年後)	110	0	25	8	46	31
C(5年後)	107	0	13	15	42	37
D(1年後)	110	2	29	5	47	27
D(5年後)	107	2	14	11	45	35
栄養(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	39	0	12	5	7	15
A(5年後)	38	1	15	6	10	6
B(1年後)	39	0	13	2	8	16
B(5年後)	37	0	14	5	10	8
C(1年後)	39	0	12	5	6	16
C(5年後)	37	0	10	5	10	12
D(1年後)	39	0	14	3	7	15
D(5年後)	36	0	14	4	6	12
芸術(専)	総数	大卒以上	大卒同等	中間	短大・高専	比較不可
A(1年後)	27	0	5	4	5	13
A(5年後)	24	0	7	1	5	11
B(1年後)	28	0	6	4	3	15
B(5年後)	24	0	5	2	4	13
C(1年後)	27	0	5	3	4	15
C(5年後)	24	0	3	1	2	18
D(1年後)	27	3	4	2	3	15
D(5年後)	24	0	4	1	3	16

表 8: マンテル検定により得られた 各評価対象間の分布の差異. 上半分が1年後, 下半分が5年後の結果であり, 「/」の左側が上昇群, 右側が下降群の結果である. 「>」は, 行に示した評価対象の分布が, 列に示した評価対象の分布よりも「大卒以上」側に有意に分布していることを意味し, 空白は, 有意な差が認められなかったことを意味する.

1年後	評価項目	工学(専)	看護(専)	看護(般)	保健衛生(般)	栄養(専)	芸術(専)
工学(専)	A	-	>/>	>/>	>/>	>/>	>/>
	B	-	>/>	>/>	>/>	>/>	>/>
	C	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/>
	D	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/
看護(専)	A	/	-	/	>/>	/	/
	B	/	-	>/>	>/>	/	/
	C	/	-	/	>/>	/	/
	D	/	-	/	>/>	/	/
看護(般)	A	/	/	-	>/>	/	/
	B	/	/	-	/>	/	/
	C	/	/	-	>/	/	/
	D	/	/	-	/	/	/
保健衛生(般)	A	/	/	/	-	/	/
	B	/	/	/	-	/	/
	C	/	/	/	-	/	/
	D	/	/	/	-	/	/
栄養(専)	A	/	/	/	>/>	-	/
	B	/	/	/	>/>	-	/
	C	/	/	/	>/>	-	/
	D	/	/	/	/>	-	/
芸術(専)	A	/	/	/	>/	/	-
	B	/	/	/	>/>	/	-
	C	/	/	/	>/	/	-
	D	/	>/	/	>/>	>/	-
5年後	評価項目	工学(専)	看護(専)	看護(般)	保健衛生(般)	栄養(専)	芸術(専)
工学(専)	A	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/>
	B	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/>
	C	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/
	D	-	>/>	>/>	>/>	>/>	/>
看護(専)	A	/	-	/	>/>	/	/
	B	/	-	/	>/>	/	/
	C	/	-	/	>/>	/	/
	D	/	-	/	>/>	/	/
看護(般)	A	/	/	-	/	/	/
	B	/	/	-	>/	/	/
	C	/	/	-	/	/	/
	D	/	/	-	/	/	/
保健衛生(般)	A	/	/	/	-	/	/
	B	/	/	/	-	/	/
	C	/	/	/	-	/	/
	D	/	/	/	-	/	/
栄養(専)	A	/	/	/	>/>	-	/
	B	/	/	/	>/>	-	/
	C	/	/	/	>/>	-	/
	D	/	/	/	>/>	-	/
芸術(専)	A	/	/	>/	>/>	>/	-
	B	/	/	>/	>/>	>/>	-
	C	/	/	/	>/	/	-
	D	/	>/	>/	>/	/	-

次に、上昇群と下降群との差異をマンテル検定により比較した結果を述べる。まず、1年後調査時の分布には、いずれの評価対象においても、上昇群と下降群の間に有意な差は認められなかった。一方、5年後調査時の分布に関しては、工学(専)以外の評価対象で上昇群と下降群の間に有意な差が生じた評価項目が存在した。具体的には、以下に示した評価対象と評価項目の組み合わせで有意な差が生じた。

- ・看護(専) : C
- ・看護(般) : B
- ・保健衛生(般) : A, B, C, D
- ・栄養(専) : C
- ・芸術(専) : A, B

なお、上記以外の組み合わせでは有意な差は認められなかった。

ところで、表6と表7における分布の偏りに注目すると、工学(専)は、つねに「大卒と同等」にピークがきているが、保健衛生(般)は、上昇群の結果である表6では、「大卒と同等」と「短大・高専・専門学校卒と同等」の2箇所でもピークを示している。特に、1年後調査時では、「短大・高専・専門学校卒と同等」がピークであるが、5年後調査時には、評価項目によっては、「大卒と同等」と「短大・高専・専門学校卒と同等」がほぼ同数となっている。一方、下降群の結果である表7では、1年後5年後ともに「短大・高専・専門学校卒と同等」にピークがきている。

以上のことから、工学(専)は、「大卒と同等」として扱われていることが大勢を占めているが、そのことをもって「学位取得に対する満足度」の上昇にはつながっていないという特徴を有している。これは、当機構における学位授与に対する価値の置き方に議論の余地があることを示唆するものである。

一方、保健衛生(般)は、「大卒と同等」と扱われている者も少なからず存在するが、そうでない者も多い。保健衛生(般)では、「職場における学士の学位の評価」で質問しているA, B, C, Dすべての評価項目で上昇群と下降群の間に有意な差が生じているので、これまで「大卒と同等」と扱われていなかった者が「大卒と同等」と扱われるようになれば、「学位取得に対する満足度」も同時に上昇するのではないかと考えられる。これは、医療機関等への広報の重要性を示唆するものである。

5 総括

工学(専)は、高等専門学校専攻科出身の学生が占めている。彼らの多くは見込み申請であるため、当機構から学士の学位が授与されなかった場合、その後の進学や就職等に少なからず影響するものと思われる。3章で示した初申請合格者と比べた場合の再申請合格者の満足度の低さは、このような背景に基づく結果であると推察される。一方、直後、1年後、5年後における「学位取得に対する満足度」をそれぞれ比較した場合、その値は下がり続けてはいない。これは、4章で示したように、「職場における学士の学位の評価」が大卒と大きな差がないためと考えられる。

それに対し、看護学では、3章の結果より、再申請合格者の「学位取得に対する満足度」が有意に高い。このことから、一般に、学位取得に対する達成感が高いと思われる。それに反して、4章で示したように、「職場における学士の学位の評価」は大卒に及ばない場合が多い。これは、保健衛生(般)でさらに顕著になる。この一因には、職場における認知

度の低さがあると思われる。これを補うためには、特に、医療機関等への広報が必要と思われる。

平成27年度からは、高等専門学校の見込み者のうち、特例適用認定専攻科出身者に対しては、学修成果と小論文試験を廃止した「新たな審査方式」に移行している。したがって、これまで申請者の多くを占めていた高等専門学校専攻科出身者に対しては、この新たな審査方式の円滑なる運用に意が払われるべきである。それに対し、一般申請者の学位審査には一層の注意が向けられることになろう。

今後は、広報とともに、単位取得や学修成果作成の支援などのサポート業務などにシフトするのも、機構のひとつの進むべき方向であると思われる。

6 おわりに

本報告書では、当機構の学士の学位授与制度を利用した学位取得者に対し、学位取得直後、1年後および5年後に行っているアンケート調査の分析を行った。具体的には、これまでの報告では十分には捉えられていない一度は不合格となり再申請後に合格した者の意見や同一人物の経年的な変化を捉えることを目的に「学位取得に対する満足度」に着目した分析を行った。

その結果、工学分野の認定専攻科出身者に関しては、一度不合格となった者の満足度は、一度で合格した者に比べ有意に低いこと、しかしながら、同一人物の経年変化においては、満足度は有意に下がり続けてはいないことが明らかとなった。一方、看護学分野においては、工学とは逆に、一度不合格となった者の満足度は、一度で合格した者に比べ有意に高いことがわかった。さらに、看護学や保健衛生といった医療関連分野では、職場においては、当機構の学士の学位は、大卒に及ばない扱いを受けていると考えられていることが多いことも同時に明らかになった。

工学分野の認定専攻科出身者は、高等専門学校の見込み申請者が占めており、学士の有無が進学や就職等に与える可能性がある。このような背景から、現行の学修成果および試験に基づく評価は、高等専門学校専攻科出身者に対し負担感を与えていたと思われる。このことが不合格経験の有無による満足度の差に影響を与えていた可能性は否定できないが、平成27年度から実施された「新たな審査方式」により、この負担感も大幅に軽減されるものと考えられる。

一方、医療関連分野では、不合格が直ちに不利益につながるとは限らず、むしろ学士の学位を得ることによる給料や待遇向上等のメリットのため、工学とは逆の傾向を示したものと考えられる。しかしながら、職場における当機構の学士の学位の評価の低さは無視できない問題である。これを補うためにも、病院関係への広報は特に重要であると考えられる。

今後は、本報告書では取り上げなかった他の質問項目との関係、ならびに自由記述欄のテキストマイニング等を進め、より詳細な分析を行う予定である。

謝辞

東京工業大学名誉教授の矢野眞和氏から、報告書全体に関する貴重なご意見を頂きました。また、国立教育政策研究所の濱中義隆氏(元当機構准教授)からは、これまでの1年後・5年後調査の経緯など広範囲なアドバイスを頂きました。さらに、事務組織である学位審査課の方々からは、直後調査のデータの収集・整理の点で多大なご支援を頂きました。最後に、本研究を遂行するにあたりデータ整理に多大なご協力を頂きました歴代の研究部事務室の方々および事務補佐員の方々に謝意を表します。

参考文献

- [1] 離散多変量データの解析, 共立出版(1986)
- [2] 平成 27 年度版新しい学士への途,
<http://www.niad.ac.jp/ngakui/kaisei/no76gakushiH27.pdf>, pp. 43(2015)
- [3] 森利枝:学位授与機構学士取得者に関する予備調査結果, 学位研究, 4, pp. 53-75(1996)
- [4] 橋本鉦市:「新しい学士」の現状と課題—学位授与機構による学位取得者のプロフィール—, 学位研究, 9, pp. 3-27(1998)
- [5] 橋本鉦市, 森利枝, 濱中義隆:学位授与機構における学位取得者の単位履修パターン—「単位累積加算制度」に関する基礎的分析—, 学位研究, 11, pp. 5-39(1999)
- [6] 橋本鉦市, 森利枝, 濱中義隆:学位授与機構における学位取得者の意識と動態—学位取得者のフォローアップ調査を中心に—, 学位研究, 11, pp. 109-149(1999)
- [7] 橋本鉦市, 濱中義隆:学士学位取得者の現状と意識—1年後・5年後調査の分析—, 学位研究, 13, pp. 59-84(2000)
- [8] 濱中義隆:学士学位取得者の現状と意識—1年後・5年後調査の分析(2)—, 学位研究, 15, pp. 77-94(2001)
- [9] 館昭:大学評価・学位授与機構における学位授与事業関係の調査研究について, 学位研究, 15, pp. 143-161(2001)
- [10] 濱中義隆:学士学位取得者に対する「1年後・5年後調査」の分析(3)—専攻分野「保健衛生学」を中心に—, 学位研究, 17, pp. 157-182(2003)

学士学位を取得された方への
1 年後・5 年後調査

まず、学位授与の申請をされてからこれまでのことについておききます

問 1 学士の学位授与の申請をされた時（1 年後の方は 2012 年、5 年後の方は 2008 年の 10 月時点）の就業状況は次のどれでしたか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。（複数に該当する方は主なもの 1 つを選んでください）

1. フルタイムで仕事をしていた
2. パートやアルバイトで仕事をしていた
3. 学生だった

1. 短期大学専攻科の学生	2. 高等専門学校専攻科の学生
3. 大学院の学生	4. 上記以外の学校の学生（具体的に： _____）
4. 主婦として家事に従事していた
5. 資格試験や大学院などの受験準備をしていた
6. 仕事を探していた
7. その他（具体的に： _____）

問 2 学位取得直後（1 年後の方は 2012 年、5 年後の方は 2008 年の 4 月時点）の進路は次のどれでしたか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。（複数に該当する方は主なもの 1 つを選んでください）

1. 学位取得前と変わらなかった
2. 転職した（再就職を含みます）
3. （学校卒業後はじめて）就職した
4. 大学院に進学した
5. 資格試験や大学院などの受験準備のみをしていた
6. 仕事を探していた
7. その他（具体的に： _____）

問 3 現在のあなたの主な就業状況は次のどれですか。あてはまる番号 1 つに○をつけてください。（複数に該当する方は主なもの 1 つを選んでください）

1. 仕事をしている（パートやアルバイトを含みます）
 2. 大学院に在学中
 3. その他の学校に在学中（具体的に： _____）
 4. 主婦として家事に従事
 5. 資格試験や大学院などの受験準備のみをしている
 6. 仕事を探している
 7. その他（具体的に： _____）
- 問 6 へ進んでください

< 問 4、問 5 は「1. 仕事をしている」と答えた方のみおききます >

問 4 現在のあなたの仕事について少しくわしくおききます。

A. 現在の勤務先に勤めはじめた時期はいつですか。（西暦で記入してください）

□□□□ 年 □□ 月

次の表のB～Eのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

B. 勤務先の業種	1. 建設 2. 製造 3. 流通・販売、飲食店 4. 金融・保険、不動産	5. 運輸・通信・電気・ガス 6. 情報・ソフトウェア 7. 学校・幼稚園、大学など 8. 病院、診療所など	9. 保育所・福祉施設など 10. その他のサービス業 11. 公務（学校、病院はのぞく） 12. その他（ ）
C. 勤務先の規模 (従業員数)	1. 29人以下 2. 30～99人	3. 100～499人 4. 500～999人	5. 1000人以上 6. 官公庁、地方自治体
D. 勤務の形態	1. 常勤の一般従業者 2. 経営者・役員 3. 臨時雇用、パート、アルバイト	4. 自営業主 5. 家族従業者 6. その他（具体的に： ）	
E. おもな仕事 (職種)	1. 事務職 2. 営業・販売職 3. 技術職 4. 教員、保育士	5. 保健・医療職、栄養士 6. 研究職 7. 美術・音楽関係の職業 (デザイナーなどを含む) 8. その他の専門職	9. サービス職 10. 運輸・通信・保安の職業 11. 製造・技能職 12. その他（ ）

問5 あなたの職場では、本機構の学士の学位は、他の学歴と比較してどのように扱われていますか。次のA～Dのそれぞれについて、もっとも近いと思われる番号1つに○をつけてください。

	大卒以上	大卒と同等	大卒と短大・高専・ 専門学校卒の中間	短大・高専・ 専門学校卒と同等	比較の対象と なる人がいない
A. 採用時の条件	1	2	3	4	5
B. 給料	1	2	3	4	5
C. 昇進・将来性	1	2	3	4	5
D. 仕事の内容・責任	1	2	3	4	5

<ここからは全員の方におききます>

問6 学位取得後に、勤め先を変われた（転職した）ことがありますか。

1. （学位取得後）仕事に就いていない
 2. 転職していない
 3. 1回転職した
 4. 2回転職した
 5. 3回以上転職した
- <転職された方のみ下の問に答えてください>
- ・転職した際に、学位を取得したことは役に立ちましたか。
1. 役に立った
 2. どちらともいえない
 3. 役に立たなかった

問7 学位取得後に、新たに取得した職業資格はありますか。資格を取得した方はその資格名を（ ）に記入してください。（たくさんある方は、主なもの2つまでをあげてください）

1. 取得していない
2. 取得した → 資格名（ ）（ ）

- 問8 これまでに大学院に在学されたことがありますか。
1. 在学したことはない → 問9へ進んでください
 2. 在学した
 3. 在学中

→ <大学院に在学された(在学中の方)にのみおきます>

A~Eのそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください

- A. 入(進)学した時期... (1. 機構の学士を取得した後 2. 機構の学士を取得する前)
- B. 課程... (1. 修士課程 2. 博士課程 3. 海外の大学院)
- C. 設置形態... (1. 昼間・昼間主コース 2. 夜間・夜間主コース 3. 通信制)
- D. 就学の形態... (1. 仕事をしながら 2. 仕事を辞めて、中断して 3. 仕事に就く前に)
- E. 就学継続の意思(在学中の方のみ)... (1. 修士課程まで 2. 博士課程まで)

さしつかえなければ、大学・研究科名を記入してください
() 大学 () 研究科

問9 学位取得後に、大学院に在学する以外で、次のような教育・学習を経験したことがありますか。経験したことがあるものすべてに、いくつでも○をつけてください。

1. 大学(学部)の昼間部の学生
2. 大学(学部)の夜間部の学生
3. 大学(学部)の通信教育課程の学生
4. 大学(学部)の科目等履修生
5. 大学院の科目等履修生
6. 大学・大学院の聴講生
7. 大学・大学院の研究生
8. 大学・大学院の公開講座やセミナー
9. 専門学校の学生
10. 通信教育講座(大学・大学院の通信教育課程を除く)
11. 市民カレッジ(地方自治体主催する公開講座など)
12. 民間のカルチャースクールなど
13. テレビ・ラジオの講座
14. 職場での集合研修
15. 海外留学(具体的に:)
16. その他(具体的に:)
17. 特になし

学位取得の意味、今後の予定についておきます

問10 学位を取得したことには、どのような意味がありましたか。次のA~Iのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

- | | おおいに
当てはまる | 少し
当てはまる | あまり当て
はまらない | まったく当て
はまらない |
|---------------------------------------|---------------|-------------|----------------|-----------------|
| A. 自分自身への自信がついた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| B. まわりの人から、「大卒」として
扱われるようになった..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| C. その後の人生の励みになった..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| D. 幅広い教養が得られた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| E. 仕事に必要な専門的知識が
得られた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| F. 仕事上での自信がついた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| G. 基礎的知識・学力が身についた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| H. さらに学習を深めたくなった..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |
| I. 自主的な学習の習慣がついた..... | 1----- | 2----- | 3----- | 4----- |

問11 学位を取得したことに対する現時点での満足度は10点満点で何点くらいですか。下のスケールのあてはまる点数に○をつけてください。

不満 ←————→ 満足

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 (点)

問12 今から5年後のあなたの就業状況を予想すると、次のどれになりますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

1. 現在の会社（病院、学校）で、フルタイムで仕事をしている
2. 他の会社（病院、学校）に転職して、フルタイムで仕事をしている
3. 就職（再就職）して、フルタイムで仕事をしている
4. 独立起業している・家業を継いでいる
5. パートやアルバイトで仕事をしている
6. 学校に通っている
7. 主に家事に従事している
8. その他（具体的に： _____）

問13 本機構による学士取得の制度について、ご意見がございましたら、自由にお書きください。

最後に、以下の項目についてお答えください

氏名をご記入ください。改姓された場合は旧姓を（ ）で付記してください。

現住所をご記入ください。

〒 _____
e-mail _____

さしつかえなければ、勤務先を具体的に記入ください。

質問は以上で終わります。ご協力ありがとうございました。

なお、本調査票にご記入いただいた「個人情報」は、機構から学位取得者の皆様へのご連絡に際してのみ使用するもので、他の一切の目的に用いられることはありません。

図 4: 調査票 4 ページ目